

イメージで決めつけないで

「性的マイノリティ」あるいは「性的少数者」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。

これは、性的指向、性自認、性別表現等において「典型」あるいは多数とは異なる性の有り様をもつ人たち（「わたしたちはここにいる」制作実行委員会より引用。）のことをいいます。

今回、戸籍の上では男性ですが女性として活躍されている中村 中さんにインタビューしました。

■中村さんが「性的違和」を感じ始めたのは、いつごろですか。また、どんなことに悩みをもっていましたか？

幼稚園の入園式で、女の子たちの髪の毛にリボンがついているのに興味を持ったらしく、「どうして自分にはリボンがないのか？」と疑問に思っただけです。これは後に母から聞いたエピソードですが、思い返せばこの時からでしょうか。

より実感したのは、小学生の時。クラスメイトの男子たちと「〇〇くんは誰が好きか？」みたいなことを話している時に、自分の番がまわってきたので、私は男の子の名前をあげたのですが、「それは変だな、何か違うっているな」という反応が返って来ました。薄々感じてはいたのですが、これが自分の中に「女性性がある」ことをはっきり認識した瞬間でした。

悩んだのは、それが原因だったのか、いじめを受けるようになってしまったことです。クラスメイトから見たら、私の中に「女性性」があるのかどうか、ということは分かりませんから、「男が男を好きになるなんて、妙な奴だ」と感じたのだと思います。ただ私も、クラスメイトの気持ちを覗くことは出来ないの、いじめ原因がなんだったのかはわからないのですが。

■悩みを、誰かに相談しましたか？

基本的には相談はしませんでした。

学生時代、私と話すことを嫌がらず、それを1年くらい続けてくれた人なら「友」と呼んでもいいのかな？と思い、ひとりかふたりに「実は男の人が好きなんだよね」という話はしまし



た。本当のことを打ち明けるのが「友」だと思ったからです。

母には、20歳になってから「女性として生きたいんだ」という話をしました。母は複雑だったでしょうが「そんな気がしていた」と言ってくれて、救われました。他の家族とはしばらくは微妙な空気が続きましたが、それぞれの人生ですし、罪になるようなことをしない限りは私を認めてくれているのだと思います。

■「性的違和」をかかえたままの日常生活で、困ったことはどんなことですか。

新しく出会う人たちに自己紹介をする時です。今でもそうですが、どこまで自己紹介しようかな？と考えながら話をします。

わたしの場合は、ありがたいことに、「歌を歌っています」と自己紹介出来るので、まずはそこから始めます。よくよく考えてみれば、相手だっていきなり全てをさらけ出しているわけではないですし、悩みがあってもいきなりそこから話し出す人も少ないと思うので、それほど困ることはないのかも知れませんが。

■「カミングアウトしよう」と決心したきっかけはなんだったのでしょうか？

学生のとき「友」だと思った人と、もっと仲良くなりたいと思ったからです。また、家族へは、男性として生きる我慢の限界も来ていましたし、成人するまで育ててもらった感謝もありますから、仁義を立てるというか、話すことが自然なことだと思ったからです。家族へ話すことで、女性として生きる覚悟を

決められたと思っています。

歌手デビューの際は、周りに集まってくれたスタッフや関係者と共に、ほんの数ヶ月で自分のセクシュアリティを公表するかどうかを決めなければいけませんでした。迷いもありましたが、昔からの経験と傾向から、必要ならば公表しようと思っていました。

私の考え方は、例えば、「自分の弱さからは逃げてはいけないな。私はこれまでだって弱さと戦って来たじゃないか。これからだってそうだ、生きることは甘くない。」というような感じです。迷いなく、真っ正面から「歌う」という行為に没頭したかったからカミングアウトすることを決心したのです。

私にとって「カミングアウトする」ということは、「勝負」とか「本気」とか、そういうニュアンスを持っています。人と本気で繋がりたいと思った時でなければいけないことなので。

■カミングアウトされた後、周囲の皆さんの反応はどうでしたか。

受け入れてくれたり、受け入れてくれなかったり、反応はさまざまでした。極々当たり前のことですが…

受け入れてくれない人との関わりあいはそんなに変化はありません。関わらないわけですから。けれども、受け入れてくれた人との関わりあいは、より味わい深いものになったと思います。自分の価値観にばっちり合う人なんてほほいないから、みんなにも「世の中にはいろんな人がいるものなんだ」と早く気がついてほしいなあと思っています。

■歌手として活動される中で、歌やパフォーマンスに込められた想い、伝えたい想いはどんなことですか。

「馬鹿にされたくない。自分の人生アリだと思いたい。馬鹿にして来た人たちを見返してやる。」というのが初期衝動ですね。そこに、「同じ境遇の人たちも見ているのだから、かっこわるいところは見せられないな。」という思いも持つようになりました。伝えたいことなんて、そんな大それたことはないです。わたしは、ただのひとりの人間なので、無我夢中で生きているだけです。

■「生きやすい社会」とは、どんな社会だと思いますか？

「自分だけの幸せのために、人の幸せを奪わない」社会でしょうか。小さいことにも、ほど良く満足して、自分の退屈しのぎに人を攻撃しない、とか。特に今はSNSなどで世界中の人とつながれるのに、ネガティブな使い方をする人がどうしても目立ってしまうことに生きづらさを感じます。そういうことを真似しないで、道徳と理性を保ち、自分が気持ちよくなっている時、他の誰かは不快な気持ちになっているかも知れないなあということを時々思い出しながら生きることが大事なかなと思います。もちろん、人間失敗しない人なんていないし、むしろ私はよく失敗をしますが、その都度、反省することが必要かなと思います。

そう考えると、ポイントはやはり「人間同士の関わり合い」ですね。「見た目」、「人から聞いた話」などのイメージで決めつけしないで、会話をしてみないと「人なんてどんな中身かわからない」って、ひとりひとりが思えたらいいのかな?と思います。私が偉そうに言える立ち場ではないのですが、せっかくのインタビューの機会をいただけたので、生意気言ってみました。

Profile

なか むら あたる
中 村 中 さん

歌手、作詞作曲家、役者。

2006年6月にシングル「汚れた下着」でメジャーデビュー。2007年セカンドシングル「友達の詩」で第58回 NHK紅白歌合戦に出場。4thアルバム『少年少女』は第52回 輝く!日本レコード大賞優秀アルバム受賞。最新アルバムは『去年も、今年も、来年も、』

また八代亜紀、研ナオコ、岩崎宏美、AAA、中 孝介、由紀さおり、など多くのアーティストに楽曲を提供しているほか、2009年10月上演の「ガス人間第1号」をはじめ、「エドワード2世」「マーキュリー・ファー」など、さまざまな舞台にも出演。2014年には中島みゆき「夜会」に出演。2016年3月舞台「ライ王のテラス」に第一王妃役で出演。さらに2016年4月にはDIR EN GREYのギタリストDieとMOON CHILDの檜山圭を中心としたプロジェクトのプロジェクトDECAYSに参加。東名阪のツアーを行う。音楽と演劇を両輪として多くの才能とインスピレーションを交わし合いクリエイターをはじめとする先鋭的な感性の持ち主の心をわし掴みにしている。